

V308a X線衛星代替機 XARM における科学運用計画

寺田幸功 (埼玉大), 田代信 (埼玉大, JAXA), 海老沢研 (JAXA), 深沢泰司 (広大), 飯塚亮 (JAXA), 勝田哲 (埼玉大), 北口貴雄 (理研), 久保田あや (芝浦工大), 水野恒史 (広大), 中島真也 (理研), 中澤知洋 (東大), 信川正順 (奈良教育大), 大野雅功 (広大), 太田直美 (奈良女大), 志達めぐみ (理研), 菅原泰晴 (JAXA), 高橋弘充 (広大), 田村隆幸 (JAXA), 田中康之 (広大), 寺島雄一 (愛大), 坪井陽子 (中央大), 内山秀樹 (静大), 宇野伸一郎 (日本福祉大), 渡辺伸 (JAXA), 山内茂雄 (奈良女大)

X線天文衛星「ひとみ」で実現しようとしていた軟X線での超高分解能分光観測を回復すべく、X線衛星代替機 (X-ray Astronomy Recovery Mission, XARM) 計画が進められている。XARMによる科学観測のアウトプットを最大化すべく、これまでのX線衛星以上にゲスト観測者のサポート活動を深く行うチームとして、搭載検出器の開発チームや衛星の運用チームとは独立に、科学運用チーム (Science Operation Team, SOT) を立ち上げ、打ち上げ前の早い段階から、軌道上での科学運用をスムーズに実施できる体制を整える予定である。現在は、こうした科学運用のコンセプトに従い、SOTで実際に実施する活動を定義している段階である。たとえば、提案された観測の効率を最大化するための運用計画の補助や、衛星テレメトリーの高次データ処理とアーカイブ、衛星データ解析用のソフトウェアと校正データベースの開発、および、検出器性能向上のためのスタディ、ユーザーサポート・ヘルプデスク等の活動を展開する予定である。本講演では、XARM SOTで展開する科学運用のコンセプト、および、具体的な活動計画について報告する。